

ツヴァイク全集

9

デーモンとの
闘争

寛三博
曠
井宮浦
今小杉
訳

デーモンとの闘争

今井 寛
小宮 曠三 訳
杉 浦 博



みすず書房

ツヴァイク全集 9
デーモンとの闘争

今井 寛
小宮曠三
杉浦 博
共訳

1973年 5月10日 第1刷発行
1974年12月20日 第2刷発行

発行者 北野民夫
発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15
電話 東京(03)814-0131(代表) 振替 東京 195132
本文印刷所、理想社印刷所
扉・カバー・表紙印刷所 栗田印刷
口絵印刷所 京美印刷
製本所 鈴木製本所

© 1973 in Japan by Misuzu Shobo
Printed in Japan

書籍コード 0398-00092-8005
落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

序論	7
----	---

ヘルダーリン	29
--------	----

神々しい青年の群れ	31
-----------	----

幼年時代	39
------	----

テュービンゲンでの肖像	48
-------------	----

詩人の使命	53
-------	----

詩の神話	64
------	----

バエトーン または靈感	76
-------------	----

実社会への出発	88
---------	----

危険な出会い	92
--------	----

ディオティーマ	109
---------	-----

暗闇のなかのさよなきどりの声	119
----------------	-----

「ヒュペーリオン」	122
「エムベードクレスの死」	131
後期の詩	143
無限への墜落	157
深紅の闇	169
スカルダネリ	177
クライスト	187
一所不住の徒	189
定めがたい男の風貌	195
感情の病理学	202
生活の設計	221
功名心	230
戯曲創作の衝動	239
現実と本体	252

物語作者	260
最後のよりどころ	268
死への情熱	274
没落のしらべ	284

フリードリヒ・ニーチエ 293

独演の悲劇	295
二重の肖像	302
疾患の弁明	309
認識の涉獵者 ^{ド・ホッテン}	325
誠実への情熱	337
自己自身への変転	351
南方の発見	364
音楽への遁走	379

第七の孤独	387
深淵上の舞踏	394
自由への教師	406
年譜	413
解説	427

精神世界の建築家たち（Ⅱ）

デーモンとの闘争

ヘルダーリン・クライスト・ニーチエ

私は没落者としてしか生きる道を知らない人
たちを愛する。彼らこそ彼方へと踏みこえて
ゆく者たちであるゆえに。

ニーチエ

透徹する精神、鼓舞する形成者

ジークムント・フロイト教授に
辛苦して刻んだこの三つの響きを

序論

苦難に苦難を重ねて自由の身に脱する人間の姿は
それだけ強力にわれわれの人間性に触れてくるものだ

コンラート・フェルディナント・マイヤー

この著作は、先に刊行した三部作『三人の巨匠』同様、ふたたび三人の詩人像を、ある内的な共通性をもつものとしてひとつに結び合せたものである。しかし、ここに内的一致といっても、それはただこの三人の像に、互いに相出会う一点があるという意味以上のことではない。私は何もそこから精神的人間というものの公式を抽出しようとするのではなく、精神そのものの発現の

仕方それぞれにあとづけ、精神の諸形式を形成してみたいと思うものである。私がこれらの著作において、つねに幾人かの人たちを意識的にまとめて論述しているのは、ひたすらあの画家的なやり方をまねているのであって、作品群にそれにふさわしい空間を与えて光と影とを効果的に交錯させ、はじめはかくされている典型の相似^{アナロジー}を、対^{つい}をつくることによって明らかにしようとするのである。対比は、私にはつねに、促進的な、いやそれ以上に形成的な要素に思われる。私が対比の手法を好んで用いるのは、それが無理なく応用できるからである。公式化は作品をまずしくするが、対比は逆に豊かにする。思いがけない反射によって対象に照明を与えたり、浮き出した肖像画に枠づけをするように空間に深みを添えたりして、あらゆる価値を高めるはたらきがあるのである。この造形美術的手法の秘密は、言葉による肖像画家の先駆者的存在であるブルタークがつとに認めていたところであって、彼は、その「対比による人生描写」において、つねにギリシアの性格とローマの性格とを同時に連関させて描出し、それによって人格の背後に潜む精神的陰影、つまり典型性を、いっそうくつきりと際立たせようとしたのである。そこで私も、伝説的・歴史学的領域におけるこの尊敬すべき先人にならい、これに精神的に隣りあう世界、すなわち文学的・性格学的領域において、これに似た成果を達成しようと期するのである。そして、ここに公にする二冊の書物は、私が『精神世界の建築家たち——精神類型学のひとつの試み』と名づけるつもりでいる一連の著述の最初のものと考えていただきたい。しかしながら、私はこれに

よって、天才の世界に何らかの枯渇した体系をうちたてようというつもりはまったくない。情熱からの心理学者、創造意志からの形成者として、私は、私のもつ造形的手腕を、それが私をどの方向に駆り立てようと、とにかく、私が心の奥底で親近感をおぼえているこれらの人々に、あげて向けようと思う。ここには、すでに内側から、完全をはばむある限定が加えられていることになろう。しかし私は、この不完全性を、全然遺憾には思わない。なぜなら、この必然的な断片性をおそれるのは、ただ、創造界に体系の存在を妄信し、精神というこの無限の世界をコンパスで遺漏なく測りきれると傲慢にも思い違っている徒輩たちだけだからである。それに対し、この広大なプランに私を誘うゆえんのは、まさに、このプランが無限なるものに触れ、しかもみずからに何らの制限も加えないという、この二重の性格そのものである。こうして私は、偶然からはじめたこの建築を、着実かつ情熱的に、まだな好奇心をもって先を急ごうとする私のこの手で更におしすすめ、われわれの人生のうえをさだかならずおおっている時空の高みの尖端に突き入るまで、築きあげてみたいと思う。

ヘルダーリン、クライスト、およびニーチェ、これら三つの英雄的形姿は、まずその外的な生涯の運命に、ひとつのめだった共通性を有している。彼らは、いわば同じ星のもとに生れついているのである。この三人は三人とも、一種人力を超えた、あるいは現世を超えたといってもいい

力に駆り立てられ、それぞれの住み心地よい生活を捨てて情熱の破滅的な颶風のなかに突き入り、命数に先んじて精神の怖ろしい惑乱、感覚の致命的な陶醉に落ちて、狂死し、あるいは自殺し果てるのである。時流と結ばず、同時代から理解されず、彼らは流星のように短命の光を輝かせて、彼らの使命の夜のなかへと墜ちる。彼らみずからは己れの道を知らず、己れの意味を悟らない。なぜなら、彼らはただ無限の果てから飛び来り、無限の彼方へと飛びゆくばかりなのだから。彼らはその生存の急激な下降と上昇との間に、現実世界にふれあうことすらほとんどない。彼らの内部には何かしら人間を超えたもの、自分の力以上の力がはたらいており、彼らは己れがその力に完全に帰属していると感じている。彼らが聴従するのは（彼らは短い時間ふとわれに帰ったとき、このことを認めて慄然とするのだが）、自分自身の意志にではない。彼らはより高い力、デモーンニッシュな力の奴隷であり、その力に取り憑かれた狂乱者なのである。

魔神的——この言葉は古代の神話的・宗教的な源初の觀念以来われわれの時代に至るまで、じつにさまざまに意味づけられ、また解釈されて来たので、これに私見によるひとつの解釈を与えておくことが必要であろう。私は、人間各人に根元的かつ本来的に生れついた焦燥をデモーンニッシュなものと呼ぶ。人間はこの焦燥のために自分自身から抜け出し、自分自身を超えて無限の境へ、根源的な世界へ駆り立てられるのである。いわば自然が、そのかつての混沌のうち、どうしても手放せなかった一部を、昔ながらの焦燥にみちたまま各人の魂のなかに残し、それが緊張と

情熱をはらんで、人間を超え感覚を超えた根源界に帰ろうと欲してでもいるかのである。魔^マ神^シは、われわれ人間のなかに入りこむことによって、ありとある危険、過度、恍惚、自己放棄、自己破滅へとふだんは静かな存在を追いたてる発酵素としてのほたらき、沸き立ち、責めたて、刺戟する酵素としてのほたらきを、具現するのである。ところで、たいていの凡庸な人々にあつては、魂のこの貴重で危険な部分は、いつしか吸いあげられ、消耗し尽されてしまう。ただきわめて稀な機会、思春期という危機、愛や性の衝動から内部世界が興奮する時期に、この自己喪失、途方もない自己放棄の体験が、予感にみちて、さしもの市民的で陳腐な生活をもおおいつくすことがあるだけである。しかしふつうには、中庸な人々はこのファウスト的衝動を自分のうちに抑えつけ、道徳^{モラル}の麻醉をかけ、仕事で紛らし、秩序を楯にせき止めてしまう。市民にとって混沌としたものはつねに不倶戴天の敵なのである。それは社会的な事柄にしても、自分のうちなる問題にしても同じことである。ところが一段と高い世界に住む人々、とくに創作にたずさわる人々の内部では、この焦燥がその日その日の作品に対する不満足という形をとって創造的にはたらきつづける。この焦燥こそがあの「自分自身を責め苦しめる、より高い心」(ドストエフスキー)を産むのであり、自己自身を超えて憧憬を遠く宇宙に向ける、あのもの問う精神をつくるのである。われわれをその自己存在、その個人的な利害を超えて一途に冒険的に危険な問題のなかへと駆り立てるすべてのものを、われわれはわれわれ自身のなかのこのデモニッシュな部分に負うてい

るのである。しかしこのデーモンも、われわれがそれを支配しているかぎりにおいてのみ、つまりそれが緊張と高揚とを与えることによってわれわれに奉仕しているかぎりにおいてのみ、友情的促進的な力なのである。この有益な緊張が過度の刺激となり、魂が誘惑的な衝動、デモニッシュなもの、火山的作用に負けるところに、その危険がはじまる。なぜなら、デーモンがそのふるさと、その領界である無限性に至りつくためには、ただ、有限のもの、地上のもの、つまりその力が己が棲家としていた人間の肉体を、非情に破壊し去るよりほかに道はないからである。デーモンは拡大することからはじめるが、相手が破裂するに至るまでその手をゆるめることはない。それゆえこの力は、デーモンをうまく御し得ない人々、みずからがデモニッシュな本性の人々を、すさまじいまでの焦燥で満たし、彼らの手から意志の方向舵を強引にもぎ取ってしまう。その結果、彼ら、意志を奪われ、駆り立てられた人々は、今やこの嵐のなかを彼らの運命の断崖に向ってよろめきゆくのみである。生の不安焦慮が、つねに、デーモンの嵐到来の第一の徴候である。血の焦燥、神経の不安、精神の動揺がまず現われるのである（それゆえ、まわりに不安と運命と破壊とをまき起すかの女性たちも魔性デモニッシュなのものと呼ばれるのである）。デモニッシュなもの、まわりには、つねに、危険と人生の危機を暗示するあやしい雲行き、悲劇的な雰囲気、宿命の息吹きが漂っている。

このように、精神的人間、創造的人間は、誰でも彼自身のデーモンとの闘争に落ちこむことを

免れないのであり、しかもそれはつねに英雄的闘争となり、愛の闘争とならざるを得ない。つまり人類に見られる最も壮絶な闘いとなるのである。女が男に屈するように、デーモンの激しい迫りに負けてしまう者もある。彼らはその人力を超えた力に屈服し、創造の精気に貫かれ浸されて、至福な気持になるのである。また、デーモンを手なづけ、その熱く激動する実体に、冷静、決然、かつ的確な、己れの男らしい意志を押しつける者もある。そしてそのまま一生涯、敵意に燃え、愛ゆえに格闘する絡み合いがつづく場合もよくあるのである。ところで芸術家にあつてこそ、そしてその作品においてこそ、この壮大な格闘はいわば具象的になる。その創造をめぐる神経のどんな末端にまでも、精神がこの永遠の誘惑者と同衾する初夜の熱い息吹き、官能のおののきが、ふるえ通っているのである。ただ創作者においてのみ、デモニッシュなものは感情の影から言葉と光のなかに現われ出でて、その威を振るうことができるのであり、われわれがその力の激情的な様相を最も明瞭に認めることができるのも、それに屈服したあの人たち、ここに私がドイツにおけるその最も意味深い例として選んだヘルダーリン、クライスト、およびニーチェのようなデーモンによって引きずり落された詩人のタイプにおいてなのである。なぜなら、デーモンがひとりの詩人の内部で暴君的な猛威を振るう場合にこそ、また芸術の一特殊形態も、火柱が立ちのぼるように生れ出でるからである。それは陶酔の芸術、熱っぽく高揚した創作活動、ふるえ沸き立つ精神の飛翔、痙攣と爆発、祭祀的放縦と酩酊、ギリシア人のいう熱狂^{フニフ}、ふつうにはただ予言

者たちや巫子たちにしか見られない聖なる狂躁、といった姿をとる芸術である。程度を知らぬこと、最高の状態に行きつかねば止まぬこと、これがつねにこの種の芸術の第一の確かな目じるしである。究極のところまで、つまりデモニッシュなものがあるさとなる本源へ帰りゆくこととしてめざすあの無限性に突き入るまで、永遠に自己を超えゆこうと欲することが、この種の芸術の特徴なのである。ヘルダーリン、クライスト、およびニーチェは、火玉と化して人生の限界を突破し、反逆の精神に燃えて形式をうち破り、途方もない恍惚のうちに己れみずから破壊させる、あの反神の巨人めいた性の持ち主である。彼らの両眼からは、明らかに、凡俗のものならぬデémonの熱を帯びた眼差しがほのめき、彼らの唇からはデémonそのものが語るのである。

いや、それどころか、デémonはこの唇がすでに沈黙し、その精神の光が消えてしまつてさえも、なおその破壊された肉体から語りつづけるのである。この怖るべき客の本性をまざまざと認めるのに、力にあまる緊張に責めさいなまれた彼らの魂がついに引き裂かれ、その裂け目を通してそれが住まう断崖の最も深い内部が見下せるようになったときにくははない。この三人のまさに没落においてこそ、いつもは血の深みにかくれているデモニッシュな力が、突然彫塑的な姿をとつて目に見えるものとなるのである。

デémonに圧倒される詩人の神秘にみちた本性、ひいてはデモニッシュなるもののそのものを、完全に明確なものにするために、私は、対比という私の手法に従つて、表面には現われないが